

な

んだかもったいぶった書き方になってしまったが、ぼくが今少しづつ書きためている出雲弁というのは、子どもたちの落語の台本である。

落語は時代が下るにつれて演芸として洗練され、話も磨かれて、全国どこへ持って行っても評価される普遍性を獲得したのだが、もともとは江戸や大阪の町町の小屋や辻で町内の人々に聞いてもらうための極めてローカルな話だから、当然その土地の言葉で語られる。江戸落語は江戸弁、上方落語は大阪弁、話の中で登場する田舎者と言えば、関東圏あるいは関西圏の地方の言葉が象徴的に使われる。

児童用の落語本は全国を対象にして、教育という役割も負うので、ほとんどが共通語に訳してある。それは極めて当然のことなのだが、残念ながら同時に話の魅力を減じさせてしまうのを避けられない。おもしろい話であることはわかるのだが、どこか頭で理解することが優先していて、言葉の生々しさにひっぱられて思わず吹き出すことなどなかなか得られない。それを感じているながら、ぼくはずつと落語の元テキストに手を加えることに消極的だった。

高尾小学校で子どもたちと落語を始めたころ、ある子に「まわりねこ」という喃を勧めた。ねこに名前をつけようとあちこち尋ね回るといふシンプルな構造の

上に同じ言い回しが繰り返されるので覚えやすかろうというのが理由だった。元は上方落語の古典小咄だが、このテキストの作者は、名前を教える人物を大阪、名古屋、福岡など日本各地にいる親戚という設定にして、それぞれの方言で語らせるという大胆な改編をしていた。奥出雲の子どもが語るのだからその中に

出雲弁がないのはかえって不自然だろうと思ひ、登場人物の一人を出雲のおぼばとし、そのせりふのみ出雲弁に直して与えた。この出雲弁をフィーチャリングした「まわりねこ」は、この子のヒット作になった。それが聞きたくてリクエストが来るほどで、その子が卒業した後も後輩たちが代々受け継いでいった。

今の落語教室でもチャンスがうかがっていたが、祖母に教えてもらえそうなのが入塾してきたので勧めてみた。松江生まれながらほとんど聞いたこともない出雲弁に相当手こずったが、予想通り松江でも大いにウケた。「○○ちゃんの「まわりねこ」が聞きたい」という声が届くほどに。

一部分が出雲弁いうだけで喜んでくれる人があるのだから、全編出雲弁の喃ならもつと喜んでくれるに違いない。こんな分かりやすい理屈にこれまで気づかなかったのは怠慢だった。ぼくはその子の次の作品をすべて出雲弁に書き換えることを提案した。

老い老いに  
木幡智恵美

5

翌日日赤に転院した夫は集中治療室で幾日か過ごした後大部屋へ移り、約一か月で退院、自宅療養を経て職場に復帰した。「腐ったかぼちゃ」と言われた夫の心臓は、その十二年後に狭心症の発作を起こして冠動脈に二本のステントを入れられ、本当に腐ったかぼちゃになってしまった。次の年には眼底出血を起こし、早期退職を決め、私も便乗する。さらに十二年後には大腸憩室出血で二度の入院と、様々な病気になりながらも古希を超えた。現在は高脂血症、白内障に脊柱管狭窄症といくつかの持病を抱えながら、酒はほどほどに飲み続け、何とか日常生活を送れているのは幸いというべきか。

「腐ったかぼちゃ」と「おばさん学生見聞録」に間に連載したのが「ギイチ君の虫遍歴」。その頃一年生だった長男は、二歳半から虫に傾倒し、保育所では虫博士と呼ばれるようになる。ところが、友だちと遊ばず、保育所には行かないと早朝から近くの雑木林に身を隠すなど心配なことばかり。内地留学で発達について勉強していた際、人と関わらないことや興味に偏りがあることが、この先生き辛さを感じるようになるのではと悩んだ。と同時に、長男の行動や発想が面白くもあり、数々のエピソードを日記に書き記していた。それらをまとめて連載したのが「ギイチ君の虫遍歴」だ。

そのギイチ君、現在は四十を前にしたおっさんになっている。相変わらず身辺お構いなしで、盆前には長袖長ズボンで帰って来た。仕事柄体力を使うからか、熊みたいにがっしりした体になっている。その長男が、なぜか孫たちに大人気だ。寛大が物心ついた頃に会った際、一緒にスイカを食べてから、「スイカのおっつあん」と呼ばれていて、どの孫も会うなりすつと懐に入っていくから不思議だ。

そんな長男も、就職した当分は悩みに悩んでいた。親父くらいの人たちに下請け仕事をしてもらわねばならないのだ。神戸に居た頃、部屋掃除に行くと、朝「行きたくなえ」を何度も繰り返しながら自転車にまたがる息子を送った。それが、今は帰省すると、御殿場に帰る日には大量の土産物買いに付き合わされる。下請けの人たちの分まで、車の後部座席が埋まるほどに。身体にがつりついていた筋肉は、年輪のようなものかもしれない。

**30代フリーター** ガザへの攻撃を続けるイスラエルが、ハマスと共闘するヒズボラを標的としてレバノンへの大規模空爆を開始したと報じられている。「事実上、全面戦争」との見方も伝えられている（9月25日朝日新聞朝刊）。

**年金生活者** ハマスとの停戦合意を拒んで世論の批判にさらされているイスラエルのネタニヤフ政権が、国民の関心をハマスとの「停戦」からヒズボラとの「戦争」へ向けさせ、政権維持をはかるうとして始めた可能性が高い。

ネタニヤフは連立を組む極右政党の閣僚から「ハマスの壊滅と人質全員の奪還をせずに戦争を終わらせることに同意する政府にはいられない」などと脅されたことがある（6月2日朝日新聞デジタル）。もし極右政党が連立を離脱すれば政権は崩壊する。ネタニヤフは、早期の停戦による人質解放を望む国民世論を変えてしまいたい。

たしかに新たな戦争は世論を変える要因になる。だが、「人命」優先に傾いている今のイスラエルの世論をさら

にひと押しする可能性もある。

ハマスの壊滅を狙うイスラエルのガザ攻撃は、タリバン政権の壊滅を狙ったアフガニスタン戦争、フセイン政権の壊滅を狙ったイラク戦争を想起させる。アメリカはふたつの戦争で泥沼にはまり、戦争遂行能力を著しく低下させた。イスラエルがハマスに加えてヒズボラとも戦争を続ければ、似たような道をたどる可能性は高い。

**30代** ロシアがウクライナ侵略を始めれば、西側諸国による制裁がロシア国民の生活に与えている影響が伝わるニュースを見聞きすることがあつた。今それがほとんどない。影響が深刻なら西側メディアが報じるはずだから、国民は戦時の割には困窮して

いないのではないか。  
**年金** だとしたら、ロシアが侵略をやめて撤退する可能性がないこと、ウクライナはロシアに占領された領土を放棄するほかに停戦を実現する道がないということも物語っている。ウクライナ国民はいずれそれを選択し、戦争は

終わるだろう。

**30代** どんな正当化もできない侵略戦争をしたロシアのやり得になつてしまふ。そのあと世界はどうなるんだ。

**年金** アメリカはこの戦争で、自らは流血を避けながら、経済制裁とウクライナへの大量の武器援助でロシアを疲弊、衰退させることを狙った。それが思い通りに行っていないことは現在の戦況が示している。

多くの国は資源大国のロシアとの取引を完全に断つことはできないし、中国は制裁の穴を埋める役割をしている。戦争で人命が失われることに対するロシア社会の許容度は西側の先進諸国よりも大きい。

疲弊はアメリカも免れない。先進国であるぶん、それに対する耐性はロシアよりも脆弱なはずだ。さつきも言ったとおり、アメリカはアフガニスタンとイラクの両戦争で、戦争遂行能力を大幅に落とした。ロシアの侵略を武力で阻むことができず、流血の戦闘はすべてウクライナに負わせた。

だが、自らは血を流さないアメリカのこのやり方も、受けるダメージは小さくない。ウクライナ戦争後は、流血の戦争だけでなく、無血の戦争の遂行能力も低下させたアメリカの姿を見ることになるかもしれない。

**30代** 国際刑事裁判所（ICC）から逮捕状が出ているプーチンは裁判所加盟国のモンゴルを訪問したが、逮捕されずに歓迎されたと報じられている。

**年金** ICCの設置を根拠づけているのは「国際刑事裁判所に関するローマ規程」という条約の形をとった国際法だ。国際法の元祖は17世紀ヨーロッパの宗教戦争に終止符を打ったウェストファリア条約とされる。つまり国際法という概念は西洋特有のものであり、東洋の国であるモンゴルはそれに泥を塗ったことになる。尾崎久仁子という国際法の専門家でICCの元裁判官は「ICCの権威の低下は避けられない」と指摘する（9月4日朝日新聞朝刊）。

西側諸国が「力による現状変更」と

ニュース日記 939  
**中村 礼治**

## 戦争のあとの世界

批判する中国の周辺海域などでの振る舞いもまた、東洋が西洋に泥を塗る行為ととらえることができる。それは一面で西洋による植民地支配や侵略を受けた東洋の「帝国」が、奪われたものを取り返そうとする動きとも言える。こうした東西の力関係の変化はグローバル化によって加速され、中国はその流れに乗ってかつての「帝国」の勢いを取り戻した。

中国の強大化に続いて、半アジア的なロシアが冷戦の敗北から立ち直り、インドが急成長を遂げるなど、東洋の復活が目覚ましい。ロシアはウクライナに攻め入る力まで持った。米中が世界の覇権を争うことになつたのは必然と言える。前世紀の末、吉本隆明は、世界史上に現代アジアがせり上がってくるという趣旨のことを語っていた。それが的中した。

**30代** 民主主義国は衰退し、権威主義の国々が勢いを増すことになる。

**年金** 資本主義は表現の自由が制限されていても、競争の自由さえあれば発展すること中国は実証した。だが、現在の資本主義はSNSの普及に見られる通り表現の自由を前提にした消費活動によって成り立っている一面がある。それが拡大していけば、資本主義は独裁を排除する方向に向かう可能性がある。